

# 李通玄による五種の初発心の説について

伊 藤 真

唐代の居士・李通玄（六三五～七三〇年頃）は、華嚴経・入法界品が説く善財童子の善知識遍歴譚を通じて、①出世（出俗）から世間（入俗）へ、②根本智から慈悲、そして智慧和融へ、③十住・十行・十廻向・十地・十一地（等覺）の各十位に十波羅蜜を修習して、「純是利他」（大正三六、七七一上）なる普賢行へと至る、独自の修行階位論を展開した。<sup>(1)</sup> その李通玄は住・行・向・地・十一地のそれぞれに初発心があると<sup>(2)</sup>して「五種の初発心」を説く。本論ではこの説を検討し、李通玄の修行階位論の特徴をうかがう一助としたい。<sup>(2)</sup>

## 一 問題の所在

李通玄は華嚴経・十地品の第十法雲地の経文を解釈するなかで、次のように述べる。

初発心従り五種の發心あるも一念を離れず。五種の初發心とは、一には十住初發心。二には十行初發心。三には十廻向初發心。四には十地初發心。五には十一地初發心なり。是の如き五位の初發

心は、皆如來の根本智と異らずして初發心を起こす。故より智體に始終無きが爲に、此の五位の初發心は皆始終無し。情識の能く見る所に非ざるが爲の故に。時日・歲月の所攝に非ざるが故に。是の如く五位は皆一時に發するが故に。…上の如く初發心に此の五種有り。逆順不同。總て初心の中に在り。一時に具足し前後際無し。（大正三六、九一四下）

ここでは五位それぞれに初發心があるとされる一方で、それらはいずれも如來の根本智（＝空慧。方法は皆無自性と体解する智<sup>(3)</sup>）を「体」として一時に發起されるのであり、常識的な<sup>(4)</sup>時間の理解で捉えられるものではない、とされている。しかもすべて「初心の中（＝初住の初發心）」にあるという。そもそも「初發心時便成正覺」（六十華嚴・梵行品 大正九、四四九下）を説く華嚴経であるから、初發心の一時にすでに後位が該攝されているという点はよいだろう。しかしそれでは五種の初發心を説く意味はどう考えるべきだろうか。

## 二 五種の初発心とは

五種の初発心とはそれぞれどのような心を発起するのか、李通玄はその内容については、初住と初地を除いて説いていない。まず、初住の初発心は

發心の者は應に是の如く菩提心を發こすべし。應に是の如く心海を開廓し、誓いて衆生を度すこと限量有ること無かるべし。（大正三六、一〇一七中）

としている。一方、初地の発心の内容は、華嚴經・十地品の初歡喜地に説かれる「三十種の廣大な志樂」であるとする（大正三六、八八一上）。それらは經文によれば「深く善根を種え、善く諸行を修め、善く助道を集め：佛の平等の法を得んが爲の故に。一切世間を救わんが爲の故に。大慈悲を淨めんが爲の故に：」（八十華嚴 大正一〇、一八一上）などの決意を指す。

これらを見る限り、初発心とは要するに「發菩提心」を指しているといえるだろう。そしてそこで求めていく「菩提」について李通玄は、声聞、緣覺、權教の「出世の菩提」とは異なり、「一乘菩薩佛果菩提」であるとして、「法身大智大悲眞俗萬行法界圓滿菩提」（大正三六、八三九上）であるとしている。

それでは五種の初発心というとき、その五種にはどのような違いがあるのか。李通玄は次のように説明している。

十住初發心の如きは、即ち其の心を止め亂れざるを以て如來の根本智慧を開發す。：

十行初發心の如きは、即ち諸佛の智慧の中に於て行の無染なることを明かす。：

十迴向初發心は：即ち十迴向の門を以て無限の大願門を起し、悲・智・法身を和融して均しく平等に進ましむることを明かすが故に。：

十地初發心は、大慈大悲を長養することを修して増勝せしむ。：第十一地は無作任運の大悲を以て初めて發心す：即ち悲より智を生じ、衆生を教化することを明かすが故に。（大正三六、九一四下）（九一五上）

これによれば五種の初発心とはそれぞれ、根本智、無染の行、大願、大悲、衆生教化など、菩提へと向かう菩薩行の歩みにおいて、五位それぞれで菩薩が体得すべきものを明らかにし、進修させるものといえるだろう。

## 三 五位の各初位が持つ意味

では次に、五種の初発心と、李通玄が説く菩薩の修行階位論との関係はどうか。李通玄は、五位は「總て初心の中に在り」として、後位を収め、そこから後位が展開していく初住の初発心を重視していた。ところが同じように初地も、

初地の發心はすべて後位を収む。時と智と前後すべて該ね、分毫も異らず。然も別して昇進を開き後を生熟せしむ。（大正三六、一〇四〇下）

とし、さらに次のように言う。

總て十信の初め、十住の初め、十行の初め、十廻向の初め、十地の初めに由る。皆是れすべて諸位を含む。一時に其の願行を起し、後位を成ずるが故に。もし初首無くば、後に何の法あらん。而して能く之を行ずれば、即ち初心にまさに後位成ず。(同上)

ここでは十一地がなく十信を言うが、本考察において指摘すべき要点は二つである。

第一に、五種の初発心についても言われていたように、初位の「時と智(＝根本智)」において一時に後位が発起され、前後次第を問うべきものではないという点。

第二に、それでもなお、時間的・段階的に昇進する階位が力説される点である。これについて李通玄は次のように言う。

然るに教門は次第昇進あらざるべからず。もししからざれば、後學のたぐいをして行は沈淪して進まざらしめん。もし解行門を以てすれば中に此の差降有り。もし理智門を以てすれば中に總て前後無し。

普光明智と菩薩行は寂用無二の門なり。已下の諸位は普光明智の用を以て差別智を修し、及び習氣を治め、並びに大願を以て悲智の門を起し大悲の行を長養し法界に周からん。(大正三六、八五八下、八五九上、九五六上)

つまり理(体)としては一切の行は根本智による初発心の一念に発起・具足されるが、行(用)としては次第昇進する修行階位を説かない限り、修行者が行を進める手だてがないと

いうのである。そうした「行」を通じてこそ、各位の初位は「後位を成ずる」といえるだろう。

#### 四 五種の初発心と李通玄の修行階位論

前項では、李通玄が十住の初住だけでなく、五位それぞれの初位も後位を含むものとして重視している点を見た。そして五種の初発心の説に従えば、初位にはそれぞれ初発心があつて、五位それぞれにおける課題を鮮明にして、修行者を菩提へと向かわせる。

ここまでの考察をまとめれば、次のようになる。

菩薩が進修すべき五位では、まず万行を該撰する初住の初発心から十住の十段階が展開するが、その初住の初発心はまた、十行・十廻向・十地・十一地の階位を展開させていく起点でもある。そして行・向・地・十一地においても、同じく初発心に導かれて初位からそれぞれの十段階が展開すると同時に、引き続き階位も展開されていく。こうして五位の修行階位はくり返し初発心を起点として歩まれていくこととなる。

ここで想起したいのが、李通玄が五位それぞれの十段階で、順に十波羅蜜の一つを行じていくとしていることである。そして、

ここにより五十箇波羅蜜を五位の中に五重に練磨す。…五位五十

重中について：五十箇波羅蜜は互ひに相ひ參徹す。五百箇の波羅蜜門有るに約して、共に主伴と爲る。(大正三六、九六二中)

と、五位を通じて十波羅蜜をくり返し、くり返し五重に「鍊磨」していくのだと李通玄は言う。つまり李通玄が説く菩薩の修行階位論では、十波羅蜜が互いに主となり伴となりながら何度も立ち戻って修習し直されることで、菩薩は「習氣」を治め「大悲を長養」していくのである。

今回検討したところと併せて見れば、初発心についても、十波羅蜜の場合と同様の階位進修の構造が浮かび上がる。初発心住で体得された根本智とそれに基づく初発心(「菩提を志向する決意、發菩提心」)を根幹としつつ、住・行・向・地・十一地のそれぞれの初位において、くり返し初発心に立ち返る。言うなれば円環的な修行道を通じて、菩薩は根本智の行用としての差別智を「五重に鍊磨」し、行を深めていくのである。李通玄の五種の初発心の説は、そんな菩薩の歩むべき道を説くものだといえるのではないだろうか。

- 1 拙論「李通玄における『華嚴経』「入法界品」十住位の善知識たちの理解」(『印佛研』五七(二)、二〇〇八年、一五六～一五九頁)。
- 2 行位に関する発心については、法蔵や澄観ら多くの言及がある『起信論』の三種の発心や、吉蔵の五種発心(『大品経義疏』)などの例があるが、ここでは検討しない。稲岡智賢氏「李通玄

の普賢観」(『印佛研』三三二(二)、一九八四年、四〇八～四一一頁)に李通玄の「五種の初発心」への言及がある。

3 大正三六、七七二上、七六八中など。

4 李通玄によれば根本智の体得は、自らの心が虚空に同じる境地に至るいわゆる仏光観(白淨宝色光明観)の実修による。空慧、仏光観については小島岱山氏「李通玄における十二縁生の理解」(『印佛研』三七(二)、一九八九年、一二二～一二六頁)、「李通玄における光明思想の展開」(『華嚴学研究』第二号、一九八八年、一八九～二八二頁)に詳しい。李通玄の禪定論については木村清孝氏の論考があり(『中国華嚴思想史』平楽寺書店、一九九二年、一七九～一八八頁)、時間の概念を超えた李通玄の成仏論については吉津宜英氏の問題提起がある(『華嚴禅の思想的研究』大東出版社、一九八五年、一八六頁)。

(略号) 大正Ⅱ大正新脩大蔵経。『印佛研』Ⅱ印度学佛教学研究

(キーワード) 李通玄、初発心、修行階位、華嚴経

(佛敎大学大学院)